
リアルで救世主。

nao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルで救世主。

【Nコード】

N6217Z

【作者名】

nao

【あらすじ】

翼はまったく予測していなかった。自分が、こんな最低で最高で冷血で暖かく、どうしようもなく孤独で楽しい物語に巻き込まれることなど。

謎の転校生！？（前書き）

短編を見ておられない方でも、楽しんで読むことのできる作品にしているつもり（笑）です。

謎の転校生！？

〈第一話〉謎の転校生！？

「山城美緒です。よろしく願いします」

彼女・・・転校生、山城美緒は、刹那の曇りもなく、かといって、明るいわけでもなく。非常に『普通』の生徒だった。淡々とまるで漫画の様な定番・・・かとしても、現実でやる者は数人しか見た事が・・・でも、数人は多いのか？・・・そう、悩ませるあいさつをし、空席に着いた。なんと、そこは僕、五条翼の席の隣だった。山城美緒は、特別に美人というわけでもないが、それなりの美少女だった。普通と特別の間だろう。なので翼はあたふたし、可愛い彼女の機嫌をそこねない様に。頑張ってみようとおもった。昔から、翼は少し浮いた人間を見ると、すぐく顔を窺がってしまうのだ。

「よ、よろしく？山城さん。」

「・・・よろしく。」

・・・あれ？翼は、呆気にとられた。普通、そこは、『よろしくね。あなたは？』などと。聞いてくるところではないのか。みじんも自分に興味がなさそうな彼女を見て、翼はため息を着いた。

キンコーンカーンコーン・・・

「きおつけ！・・・礼」

「ありがとうございました」

次は数学かと、いそいそと準備を始める翼に、山城は歩寄った。そして、思いがけない言葉を口にした。

「あの。・・・ご・・・五条？教科書忘れて、見せてくれない？」

「え・・・あ、いいよ？」

???

どういうわけか、何故か翼に興味のなさそうな美緒だったのだが、左隣の女ではなく、忘れたものを、翼に借りようというわけだ。

どうしてだろう??

翼に、二つの考えが浮かんた。 1、気になっている。

2、ただのパシリ。

・・・さあて。どちらなのだ！？彼は息をのみ、チャイムが鳴ったと同時に、自分の机についた彼女の机をはっと見た。

なにかが始まる。そう予感して。

山城美緒の沈黙。

〈第二話〉山城美緒の沈黙。

「あのさ、パン買いたいから、ついてきて。」

「え？」

しーん……。……。映画や漫画であるアレだ、ほら。めっちゃ周りしーんてなるやつ。……。まさか、そのシーンが間近で体験できるとは。

……。今、僕、平凡で普通でださくて格好よくなくて、運動神経平凡で。なにやらせても平均な僕が。

転校生の山城美緒と名乗った美少女の部類に入る、ほら。学校に必ず一人はいるかんじの女の子に、食堂に誘われるなんて。

夢だ。

そうだ、夢だよ。

だって、クラスで一番イケメンの男が声をかけても全然興味を示さなくて、僕にだって最初、そっつけなかった女が、何故、なぜ、なぜ、如何して、どうして、ドウシテ。

僕を飯に誘うんだ！？

「あの、さ。僕はいいよ」

「・・・は？」

「山城・・・、男に人気あるし！！そつちと食べてきなつて・・・ど、ドッキリなら。僕、面白い反応期待できないよ！？・・・とにかく、本当の事、言つて。」

「・・・どーゆーこと？まったく・・・話しがつかめない」

「だからあー！！・・・ドッキリか、なんかなんだろお！？僕、君に氣に入られるような、かつこいい奴じゃないし・・・。」

「ふうーん。・・・あんた、この学校で、そーゆー設定なんだ。」

「・・・？、せつてい？」

「暗くて根暗で、普通で平凡。・・・ついでにゆーと、良いようにパシられちゃう役割でしょ」

「！ー！」

ほら。今日会つたばかりの人にこんな事言われるくらい、僕はダメなんじゃあないか。

あー・・・もう。これだからいやなんだ。
だから話しかけるなつて言つたのに。

「・・・まあ、いいよ。そんな顔するなら、食堂はあきらめる。・・・あと、ドッキリとかじゃないから。」

「えっ・・・。」

「私の意志。・・・ってことで。さよなら」

「・・・はあ？」

そう言い、山城美緒階段をくだり、僕には見えなくなった。
私の意志って・・・きっと、嘘だね。そう思いながら、教室に
戻る。

僕が数十メートルの廊下を歩いているときだった。

「ねーねっ!」

振り返ると、予想通り。

山城だった。僕にとっちゃあ迷惑な話し。山城になつかれたみたい
だ。

先生に言っただけ縁を断ち切る事もできるが、僕はあまり悪い気はしな
かった。

・・・かわりたくないけど、可愛い女の子になつかれて、嫌な男
子は居ないだろう。
僕もそんな感じた。

適当な話しをしながら、僕と山城は教室まで並んで歩いてきた。
・・・しかし。教室に入った一歩のところで、ぼくの足は止まった。

「ぶははは!!! きつもー」

「オタクってんだ、こいつ」

「え……?」

いつも真ん中で固まっている、クラスの中心的ギャル女5人が、僕の引き出しをあけている。

……女たちの手にあるのは、漫画。
僕の描いた、漫画だ。

「投稿しないによ?」

「オタクくゝんっ。キモいんだけどお?」

「三条くんてゝ。こんつつな趣味なんだねえ?」

「女とかあ、……怖いほど可愛いよねえ?しかも、体つき。普通の女と変わらないよねえ?なんでこんなにいゝ。可愛くかけんのお?……もしかしてえ、本物の女、換金とかして、モデルってんワケ?」

「えー!エツチゝゝ!!あははっ」

「まあ。確かに、してそうだよねん。あんたゝ」

「へんたいつぽゝい」

「やっただあ!きもオ!?」

・・・・・・・・・・いつもの事。

僕がため息をつき、教室を出ようとした、刹那。

「ふうん。確かに、女の子、可愛いね」

「えっ・・・山城!？」

山城が僕の漫画を丁寧に読んでいる。

「ねっ!そー思うでしょっお!？美緒」

「・・・誰が・・・美緒なんて呼んでも良いなんていった？」

「え・・・？」

「だいたいさ、あんたらあ。この作品、そーゆーエロ目線でしか評価できないの？」

「なっ・・・!!あんた、なんなわけ!？」

「山城美緒です。」

「うざあ!!こっちの味方じゃないの!？最悪!!詐欺、馬鹿!!」

あんたをターゲットにするから。・・・許せない。うざいうざい。
うざいつ消えなさいよ」

「あははっ、大変すばらしい。・・・つかさあ、テメエが最悪なんだよ。ギャルかなんだかしんねーけど、人のもの、趣味、馬鹿にできるほどえらいワケ！？はっ。笑わせるな。換金なんて、お前みたいにそーゆう事想像するほうがエロいつつの！！だいたい、この作品、おもしろいよ？自身もっていいよ。」

「・・・あ、ありがとう？」

しーん。まただ。二度目だ。・・・今度は、あの口だけは誰にも負けないギャル軍団に勝った女、山城美緒を恐れている、沈黙だな。まあ、それもそのはず。あのギャル軍団も、みごとに腰抜け状態。

・・・山城美緒。

僕はこの女が、よく分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6217z/>

リアルで救世主。

2011年12月26日21時45分発行